

なぜ、中国はスカボロー礁の支配に執着するのか？！

中国による南シナ海の内海化・軍事的聖域化を断じて許すな!!

樋口 譲次

○フィリピン船、スカボロー礁近海で中国の高圧放水により損傷

スカボロー礁は、フィリピン・ルソン島の西約 230 キロの所にある。

領海基線から 200 カイリ（約 370 キロ）までの排他的経済水域（EEZ）を認めている国連海洋法条約（UNCLOS）に基づけば、フィリピンの EEZ 内に位置する。フィリピンもそれを主張しており、至って正当だ。

これに対し、中国は、スカボロー礁の中国名「黄岩島」という呼び方を使って「島（岩礁）は中国固有の領土だ」と主張し、2012 年にフィリピンから奪取し実効支配している。「九断線」を主たる根拠しているが、尖閣諸島の領有権主張と基本的には同じ構図であり、現在も両国間で争いが続いている。

その周辺海域で 4 月 30 日、フィリピンの船が中国海警局の艦船から放水による被害を受ける事案が発生した。

フィリピン政府の発表によると、フィリピン漁船の支援活動に当たっていた漁業水産資源局の船と沿岸警備隊の巡視船 2 隻が、中国海警局の 4 隻の船からの高圧放水により操舵室や手すりなどが損傷する被害を受けたという。漁業水産資源局の船は少なくとも 8 回の放水を受けたほか、3 回も衝突されたと説明している。

フィリピン政府は、スカボロー礁はあくまで自国の EEZ の内側にあると主張して、中国側を非難するとともに、「(沿岸警備隊の艦船は) ひるむことなく、フィリピン漁業者の支援と安全確保のために合法的な活動を続ける」と表明した。

一方、中国外務省の林劍報道官は 30 日の記者会見で、「島は中国固有の領土だ。フィリピン側は挑発的な行為を直ちにやめ、中国の主権を守る確固たる決意に挑戦しないよう忠告する」と反発した。

両国はここ数か月、スカボロー礁やセカンド・トーマス礁を巡って度々衝突を繰り返している。

一体なぜ、中国は、2016 年 7 月の南シナ海仲裁裁判所（国際裁判所）によって無効とされた九断線を根拠に、ここまでスカボロー礁の支配に執着するのであろうか？

○なぜ、中国はスカボロー礁の支配に執着するのか

その主たる狙いは、九断線主張の背景である、南シナ海を「中国の海」、すなわち中国の内海化・軍事的聖域化することにある。

中国は米軍のベトナム撤退後の 1974 年、西沙諸島をベトナムとの武力衝突で奪取・占領した。その後、軍事基地化を推し進め、ウッディー島（中国名：永興島）には 3000m 弱の滑走路を整備し、J-10 などの戦闘機や地对空ミサイルを配備・展開し、H-6K 爆撃機の離発着訓練などを行っている。

また、2014 年以降、南沙諸島にある 7 つの岩礁の埋立て・人工島化を強行し、砲台といった軍事施設のほか、滑走路や港湾、格納庫、レーダー施設などをはじめとする軍事目的に利用しうる各種インフラを整備し、軍事基地化して活動を活発化させている。

また、前述のスカボロー礁では、近年、中国の艦船による測量とみられる活動が確認されたとされているほか、今後、新たな埋立てが行われる可能性も指摘されている。

もし、スカボロー礁において埋立て・人工島化・軍事基地化が進められた場合、西・南沙諸島と相俟って南シナ海支配のトライアングルが形成されることになる。

その結果、まず、スカボロー礁は、中国の艦艇などが太平洋へ進出するバシー海峡に最も近いことから、レーダー施設や滑走路が設置されれば、南シナ海の深海部に潜伏する弾道ミサイル搭載原子力潜水艦（SSBN）や各種艦艇が、ここに配備される航空機やミサイルの掩護下に太平洋への戦力投射を格段に容易にすることになる。

また、米軍などの艦艇や航空機がバシー海峡から南シナ海へ侵入するのを阻止できる可能性が高まる。

最も大きいことは、南シナ海の内海化・軍事的聖域化の進展である。

南シナ海の深海部に SSBN の潜伏海域を確保して、対米「接近阻止・領域拒否（A2/AD）」戦略、特に対戦略核態勢を強化するとともに、海南島の空母や人工島配備の航空機・艦艇の運用とが合わさって海上・航空優勢を獲得することができる。それにともない、漁業・海底資源の独占、南シナ海での「防空識別区」の設定・領空化、国際的海上交通路（シーレーン）である南シナ海の自由航行の制限や妨害、さらには領海化（内水化）が達成できる。

さらに、周辺地域への経済的・軍事的影響力の拡大とともに、東南アジア諸国連合（ASEAN）を中心に地域覇権を確立し、それを基盤に「一带一路（OB/OR）」、なかでも「一路（OR）」構想の展開に一段と拍車が掛かることになる。

このように、中国がスカボロー礁の支配に執着するのは、南シナ海を内海化・軍事的聖域化することによって、対米（核）戦略や地域覇権の確立、さらには OR の推進などの上で、極めて重要であると考えているからに他ならない。

○中国による南シナ海の内海化・軍事的聖域化を断じて許すな

スカボロー礁は、周囲 55 キロの三角形の環礁で、最高点は標高約 3 メートルの岩礁である。礁湖には南東部に外海と繋がる水路（開口部）があり、小型・中型の漁船がそこから礁湖に出入りし、漁業活動あるいは強風除けなどの目的で利用している。

このように、スカボロー礁は極めて小さな岩礁に過ぎないが、その経済的・地政戦略的価

値は甚大である。

中国の妨害行動は、ちょうど豪軍と仏軍が正式参加し、日本（自衛隊）をはじめ、ASEAN加盟国のマレーシアやベトナム、ブルネイなどを含む14か国がオブザーバー参加している米比合同軍事演習「バリカタン2024」（4月22日～5月20日）の真最中に起こった。これに反対する中国の示威行動かも知れないが、その強引な振る舞いは目に余る。

残念ながら、現在、スカボロー礁は中国の実効支配下にあるが、まずは、その埋立て・人工島化・軍事基地化を防ぐことが最優先である。

そして、中国の「九段線」内の海域における「歴史的権利」の主張は、国際裁判所によって如何なる法的根拠も存在しないとして全面敗訴している。この歴史的に重要な裁定に従い、「法の支配に基づく自由で開かれた海洋秩序」を求める国際社会の力を結集してスカボロー礁問題を正常化することが重要である。

そのため、「航行の自由」を掲げてフィリピン軍とともに合同パトロールを始めた日米豪が中心となってフィリピンを全面的に支援し、中国の力による一方的な現状変更の暴挙を何としても食い止めなければならない。

併せて、南シナ海は、太平洋とインド洋を結ぶ海上交通路（シーレーン）の要衝で、世界の貨物の約3分の1が行き来し、日本の海上貿易量の約50%、原油の約80%が同海を經由する。また、南シナ海は、国際航空路の大動脈でもある。

その「航行の自由」を維持するため、ASEANをはじめ世界各国や国際機関などの関与の下、何としても中国による南シナ海の内海化・軍事的聖域化を阻止しなければならない。